

第33卷・第12号 昭和28年5月15日第三種郵便物認可

昭和60年12月1日(毎月1回1日発行)

牧草園藝



● エンバクの主要病害の診断と防除のポイント ●

雪印種苗(株)千葉研究農場<西原>



葉枯病

Drechslera avenae



かさ(暈)枯病

Pseudomonas syringae
pv.coronafaciens



レッドリーフ病

Barley yellow dwarf virus
Wheat yellow leaf virus



冠さび病

夏胞子層(左) 冬胞子層(右)
Puccinia coronata



葉枯病

葉に初めゴマ粒大で茶色の斑点が所を決めず現われ、それが次第に広がって $5-20 \times 2-3\text{mm}$ 大となり中央は褐色、周りは黄色を帯びる。多数に生じ合きてひどい葉枯れをひき起こす。下葉から上位の葉に広がり、出穂ごろ最もまん延する。種子伝染を行うほか、前年の被害茎葉からも伝染する。品種によって強弱の差がある。

かさ(暈)枯病

葉や葉鞘が侵され、大型で楕円形の病斑ができる。これは中心が灰白色で、それを囲んで淡緑色の幅広いかさ(暈)が現われる。これが本病の大きな特徴である。日がたつとこのかさも黄変いやがて灰白色に枯れる。病勢の激しいときは病斑が密集して生じ、葉はたちまち枯れてしまう。葉鞘が侵されると、内部の未展開葉までやられ、葉は出すくみとなる。本病は一種の細菌による病気で、被害葉内に潜伏する細菌が伝染源となるほか、種子についた細菌からも伝染する。品種によって強弱の差が見られる。暖地に多い病気である。

レッドリーフ病

エンバクの葉が赤くなる病気であるが、よく見ると、1枚の葉では葉先から赤くなる。赤くなつた葉は次第に枯れる。多くの葉が侵されると株の生育はおちる。1枚の畠では縁に早く発生する傾向がある。本病の病原はウイルスであるが、それには今のところ2種類があるらしい。共にムギクビレアブラムシによって媒介されるので、防除にはこのアブラムシの防除が大切である。また両ウイルスともコムギ、オオムギ及びライグラス等牧野草にも寄生するので注意を要する。

冠さび病

葉や葉鞘に発生する。初めその表面にだいだい色の小点が現われ、これが少し大きくなるとともにふくれ、はれ物状となり(夏胞子層)、中からだいだい色の粉(夏胞子)が飛散する。のちこれと混って黒色の条斑(冬胞子層)を生ずる。これはのちふくれるが、久しく破れることはない。本病菌は暖地では夏胞子世代で冬を越し、まん延する。 20°C がその最適温度である。寒地では山野に自生するクロウメモドキが中間宿主となっている。エンバクの品種・系統間には冠さび病抵抗性に差異があるが、病菌にもいくつかのレースが存在するので、品種の選択には常に注意が必要である。